貨幣数量説の研究

堀家文吉郎 著

東洋経済新報社

貨幣数量説の研究

堀家文吉郎 著

東洋経済新報社

著者紹介

1920年　東京に生まれる.
1944年　早稲田大学政治経済学部卒業.
現　在　早稲田大学教授（政治経済学部）.
著訳書　リンドベック『貨幣分析の研究』（共訳，東洋経済新報社，1969年）.
リチャードソン『第三の通貨』（共訳，金融財政事情研究会，1972年）.
『銀行行動の研究』（日本経済評論社，1975年）.

貨幣数量説の研究　　定価 3700 円

昭和63年 4 月21日 発行

著　者　堀家文吉郎（ほりけ ぶんきちろう）
発行者　高 柳　弘
発行所　〒103 東京都中央区日本橋本石町 1-2-1　東洋経済新報社
電話　編集 03(246)5661・販売 03(246)5467　振替 東京3-6518
印刷・製本　東洋経済印刷

本書の全部または一部の複写・複製・転訳載および磁気または光記録媒体への入力等を禁じます．これらの許諾については，小社(電話03-246-5634)までご照会ください．
© 1988〈検印省略〉落丁・乱丁本はお取替えいたします．
Printed in Japan　ISBN 4-492-46023-3

はしがき

この本は私がこれまでに、主として『早稲田政治経済学雑誌』に書き継いできた貨幣数量説に関する旧稿を取りまとめたものである。一番古いものは三〇年以上前の執筆にかかり、一番新しいものでも発表してから一〇年は経過しているだろう。本来ならもっと早くに本にすべきだったのだろうが、一つ書き終わると次の主題が打ち続いて思いつかれるので、「まァこんな所で打止めか」という自身での見極めがなかなかつかなかったことと、論文の本数が増えるにつれて、古いものはそれだけ古くなり、「今さらこんなものをまとめてみたところで、どれほど世のため人のためになることか」という躊躇の気持が段々濃くなってきたこととによっている。

それを取りまとめに踏み切らせたのは、一つには「この際まとめなさい」とこれまた一〇年来言い続けてきてくれた数多くの先輩や友人たちのおかげである。そして、もうひとつには、喜んで良いのか困って良いのか半々くらいだが、「これこれの論文の抜刷りが残っていませんか」という問合わせが、たまにだがあったことである。大抵そういうのは簡単に見つからないことになっていて、見つけて手元の抜刷りをコピーしようとすると、昔の紙に刷ってあって、雑に扱うとおおもとが滅茶苦茶になりそうだったりするのだが、そんなこんなで思い切って取りまとめ作業に取

り掛かり、ようやく陽の目を見ることになったのがこの本である。

全部をそのまま複刻すると、本文のページ数は全体で軽く三〇〇を超えたのだが、出版社としてのソロバンの関係からか「できるだけ圧縮してくれ」と言う。打ち明けたところが、今から考えると昔は随分と気障な文体と古風な文字を使って文章を書き、持って回った言い回しをしたものだと、いくらかは反省していたところだったので全面改稿することとし、まず何よりも素直な文章に書き改めるとともに、場合によっては面積にして三分の一くらいにもなる箇所もあった旧稿の「注」をできるかぎり「本文」に繰り入れ、省略できるところは省略し、併せて人名などのヨコ文字の固有名詞の表記を今ふうに改め、かつ常用漢字をできるだけ使うことにした。まだ尻尾は残っているに違いなく、だから読者はどう思うかしらぬが、少しは今ふうに改まっているはずである。

このために「注で遊ぶ」自己満足はできなくなったが、思い切って枝葉を刈り込んだために見通しが良くなり、通読してみて「貨幣数量説」とはこんなものだったのかと、自分でも改めて気がついたことが多い。自分なりに納得がいくようになったのである。それは何よりも、分析用具としての貨幣数量説の時代は終わったということである。

その基本的要因は第一に、貨幣が「国家貨幣」中心の時代から「銀行貨幣」中心の時代に移ったことが挙げられるだろう。マル優の原則廃止に伴ってマネーサプライの定義を変えようかというご時勢だから分りが早いだろうが、確たる量が捉え難くなったことがある。第二に、貨幣のストックと財貨のストックとを向い合せにして、貨幣をもっぱら「交換媒介」機能を果たすものとして捉えるのではなく、貨幣はいく度も市場に出没するのに財貨は一度しか市場に現われないことから、貨幣のストックと財貨のフローを向い合せにするほうがより正しい捉え方だという認識が固まり、このために貨幣の「価値貯蔵」機能が重視されることになった。このことがやがて「貨幣的経済理論」の発生を促したのだが、そのそもそもの論理構造が「交換方程式」だった。要するに着目する貨幣の機能のウェイトが変

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

わったことがある。第三に、経済分析の仕方が「静学的」から「動学的」なそれに、つまり結果の比較から過程の追究に重点を移したことがある。それだけ与えられた自然時間におけるステップを、コマ切れにして見る発想が有力になったのである。

ほかにもいくつかの事情があるのだろうが、そんなこんなで「貨幣数量説」の経済分析における肩身はしだいに狭くなってきた。けれども、昭和一ケタの時代に一〇銭だった「もり・かけ」がいま三五〇円になったことを知ると、では日銀の発券高はいく倍になったのかとフト考えることがある。これをしも数量説的発想というのだろうが、そんな形でこの教説は今に生きている。不思議というほかはないだろう。

それかあらぬか、私が数量説に関する論文を初めて活字にしたとき、「僕の最初の論文も数量説だった」と言われた（鬼籍に入られて既に久しい）大家があった。これがおだてなのか冷やかしだったのか、今となっては聞きただす術とてない。だが、それにつけてもこの形にようやくまとめえたこの本を献呈して感謝の意を示したい同学・物故の先輩は、縁の厚い薄いを問わず甚だ多い。そうした人たちの暗黙の励ましが、この本を作らせたのである。で、この本は目の黒い人たちに買って貰いたいのは無論だが、いまの私の気持ではどちらかというと後ろ向きのものである。

この本ができるについては、直接に編集に当った小川正昭さんに大変お世話になった。彼は徹頭徹尾我慢強いおふくろの役に回ってくれた「最初の読者」である。また、読むとおかしい昔ふうの日本語を今ふうに書き改めるのに示唆を与えたり、巻末の索引の項目を拾い出したりで大健闘をしてくれた研究室の同人鈴木真実哉、藤原洋二、沈徹の三君にも心から感謝したい。しかし、改めて有難く思うのは私の「学部」である。到底商品にはならないペーパーを活字にする機会を与えてくれ、まとまる見込みがあるかどうか定かでないのによく書き継がせてくれたのだった。また、およそ出版事情困難な折柄、このような本を作ることを可能にしてくれた東洋経済新報社への謝意も忘れてはな

らない。こうして半年以上の悪戦苦闘の跡を振り返りながら、四方八方への謝辞のうちにこの「はしがき」を終わるが、思えば幸せな本だし、幸せな著者である。

昭和六三年三月

早稲田大学政治経済学部の研究室において

堀家　文吉郎

目次

はしがき
序章　数量説と交換方程式……1
一章　価格革命と数量説……15
——ボーダンとナバロ——
二章　流通速度の登場……30
——ペティ、ロック、カンティロン——
三章　交換方程式の原型……49
——ジョン・ブリスコ——
四章　数量説の埋没……67
——ジョセフ・ハリス——
五章　命題提示における混乱……82
——デビッド・ヒューム——

六章　連続性の切断と命題の伏在……98
——アダム・スミス——
七章　数量説と部分分析……111
——J・B・セイ——
八章　生産費説と数量説……126
——J・S・ミル——
九章　検証の精神……144
——アービング・フィッシャー——
一〇章　数量説からの離反……162
——ラルフ・ホートレイ——
一一章　一般化へ向かって……177
——J・M・ケインズ——
終章　数量説の消滅……194
——ミルトン・フリードマン——
参照文献
人名索引

序章　数量説と交換方程式

一

貨幣数量説とは何か。そのもっともひろく受け容れられた表現は、もし貨幣の量が増加または減少し、他の事情が同じにとどまるならば、物価はそれと正比例の関係をなして変化するであろうというものであると述べた著者がある[Hageland(1951), 169]。この叙述で重要なことは、第一に、この命題は、貨幣量と物価という二つのものしか問題にしない、第二に、貨幣量の変化が物価を変化させるので、その逆ではない、第三に、貨幣量と物価との間には正比例の関係がある、の三つである。貨幣量の変化と物価の変化の間に因果性と比例性を認めることが数量説の根本的な精神である。

ただし、ここに「すれば……するであろう」という表現で示される因果性は、時間的前後関係をふくんだそれであって、けっして同時的な因果規定をしようとするものではないであろう。それはあたかも、需要が増大すれば価格は騰貴するという、いわゆる需要供給の法則に見られる因果性のようなものである。

経済分析において、特定の財の価格とか、生産量とか、所得とか、投資水準とかといったような諸変数を、たんに

時間の変化に従って「それ自身のために記録し、叙述することは明らかに無意味である。……経済分析の一つのしごとは経済過程の歴史的経過を説明することであり、……他のしごとは、特定の仮定のもとにおいて、いかにして経済過程の経過が、特定の初期条件から発展するであろうかについての説明を与えることである。……二つのしごとのうち、疑いもなく第二のものはいっそう重要であり、ひとは第二のものこそ経済分析の真のしごとだといいさえもするであろう」[Schneider (1953), 190 f.]。

じっさい経済分析に要求されていたのは、ある時点における変数の変更が、他の時点の他の変数にどんなふうに影響していくか、いわばいかなる経過を辿って、いかなる結果をもつかという意味での因果性の発掘にあった。だから経済に関するもろもろの理論あるいは命題はこの要請、すなわち経過か結果かのいずれかまたはおそらく双方を明らかにしようという要請に答えるものでなければ、ひろく受け容れられるところとはならなかったに違いない。ところが数量説は、古くから知られ認容されていた、いわば一種の格言ともいわれるべき命題であった[Schumpeter(1954), 312]。

じっさいそれの成立年代は、その始源についてのいくつかの探索がいまだその確証をとらえられないほど遠いむかしのことであった。ということはおそらく、その成立は経済における循環という事実がいまだ気づかれず、または気づかれていてもそれを適切に捉える方法が知られていなかった頃のことであったろうということである。すなわち経済諸量がストックまたはバランスとして捉えられることはあっても、フローまたはトランスファーとしては未だとらえられることのなかった時代に、この命題は生誕していたと思われる。数量説の命題は、じつにこの雰囲気においてこそふさわしいものであって、その明示的にあるいは暗黙にもった、あるいはもたねばならなかった制約はこの解釈を妥当と思わせるのに充分なものである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ところがやがて、経済諸量をフローとして捉える着想が導入されたとき、すでに数量説は確固たる名声をもった教説であったために、ひとびとはこの教説を、全く別個のすなわち諸量をフローとして捉える舞台において論証しようとした。しかしそれは結局本来数量説を述べるにはふさわしくない装置をもっていたために、角を矯めて牛を殺す結果を導いたように思われる。本章で述べようとするのはこれらのことである。そしてこれらをつうじて、なぜ数量説が「おそらく、そのなまのままの形ではけっして支持されなかった」[Boulding(1948), 313]といわれ、また「こんにち、よしんばあるにしても、ごくわずかの経済学者しか厳密には主張しない」[Samuelson(1951), 346]ものであるのかについてのある意味での解答を与えたいと考える。

二

経済諸量については、ここでは財貨のストックと貨幣のストックが同一の時点で対置されている。この原始的な、そしておそらくもっとも数量説にふさわしい舞台でも、この教説は因果を追求していたのである。しかし求められたのは変化ではなく差異であり、経過ではなくて結果であったから、問題は静学的に扱われたのであった。たしかに物価は時とともに変化してゆく。しかし「たとえ歴史的に変化する世界でも、その変化する位置のそれぞれが、静学的均衡の継起的状態として扱われるならば静学的に扱われうる」のである[Samuelson(1949), 354]。そしてこの場合数量説が拠ったのはこの方法であった。

ここに一連の与件があれば、それに対応する均衡状態がある。時間の経過とともに一連の与件が変更されたならば、新しい均衡状態をもつことになるわけである。そこでまず第一の与件群をもとめてそれに対応する均衡状態をもとめ、次にこの多数の与件のうちの「一つのものだけ」を変更した第二の与件群を考え、それに対応する均衡状態を

もとめる。そして、この二つの均衡状態、ならびにそれに対応する体系の均衡値を比較するならば、私どもは、ここにあらわれる均衡状態の差はもっぱらある一つの変更された与件の差異によるものであることを知ることができる[Schneider(1953), 202 f.]。いわゆる比較静学の分析がこれであって、重要なのは同時に一つの与件だけを変えるのでなければならないということであるが、これによってものごとは二枚の均衡状態を示す写真の重ね焼きの方法で処理されている。その一枚の写真はある一連の与件に対応する一つの均衡状態を示すわけだから、その一枚の写真の中の諸変数は無時間の相互依存関係を示していて、諸変数は静学的に扱われている。けれどももし、同じく静学的に扱われた別の均衡状態を示す写真があって、それは最初の写真に含まれた一連の与件のうち一つしか最初のものと異なっていないとするならば、ここに時間的前後関係をふくんだ因果関係は、たとえ取扱いが静学的でも解明できるわけである。この方法によると、ある一つの与件の変更という原因によるAの均衡状態とBの均衡状態の差が明らかにされうるだけで経過は説明されない。このために一つの均衡状態から他のそれへの移動の態様や経過は究明できないけれども、原因と結果の関係だけは明らかにしうる。

どうしてこの舞台での数量説がここでとどまったかといえば、数量説確立の当時にあっては、そもそも諸変数の異時点間の相互関係とか期間という概念とかがたとえ知られ考えられていたとしても、それらを的確に表わす分析方法を確立するには至っていなかったであろうこと、そしてじっさいに動態過程の分析の方法に関心がむけられ、こうした分析が、先駆的例外はあるにしても、盛行をみるに至ったのは今世紀の第二四半期以後のことであったという事実をもって答えるよりしかたがないであろう[Samuelson(1949), 352]。じっさい古典学派が提示したさまざまの因果性を究明する命題は、おおむねこの方法によって発掘されていたように思われる。ついでながら、かれらによって好んで用いられた「究極において in the long run」という表現は、こうした場合の経過を抜きにしてということの別

の表現であることが多いようである。

ところで数量説の場合、ある時点の一連の与件群のもとにおいて追求された均衡値は物価であり、二つの均衡状態の間において変更されたただ一つの与件は貨幣量というストックであったことは明らかである。しからば物価とは何か。

いまここにある貨幣のストックがあり、それにたいして売られなければならないさまざまな財貨からなる絶対的に固定されたストックが考えられ、貨幣はすべてこうした諸財貨のストックを買うために使われなければならないとしよう。このとき財貨一般の一単位で購いうる貨幣の量は物価であり、貨幣の一単位で購いうる財貨一般の量は貨幣の購買力、あるいは貨幣の財貨一般で測った交換価値であって、物価と貨幣の購買力あるいは貨幣の交換価値とは相互に逆数関係にあり、完全に言換えの可能なものである［Fisher(1911a), 13f.］。それゆえ私どもは、ここで物価のかわりに財貨一般で測った貨幣の交換価値を考えても、またある貨幣以外の基準財によって測られた貨幣の価格を考えてもかまわないことになる［Pigou(1923), 175］。そしてこのことが可能になると、私どもは垂直軸にこうして表現された貨幣の価格すなわち物価の逆数をとり、水平軸に貨幣の数量をとることによって、貨幣の価格の決定される機構としての市場を考えることができ、そこにおける貨幣にたいする需要曲線と貨幣の供給曲線を考えさえすればよいことになるのである。ここで、私どもは方向を転じ、いま水平軸に測ることにした貨幣量について、少しばかり考えることにする。

ここに貨幣とは、計算貨幣で測った価格が固定かつ不変のものであり、したがって基本的には価値尺度としての機能をもち、それゆえに一般的受容性をもった交換の媒介物であり、またそれゆえに最も流動性ある資産としての性格をもつ一切のものを総称する語である。したがってここでは、貨幣の機能を果たすものならば、鋳貨・政府紙幣・銀

行券・銀行貨幣の別を考えない。

ところで、ある時点におけるバランスとしての貨幣の供給量は、数量説の世界では、金融組織の恣意的な決定によって外生的に与えられる。つまり貨幣の供給曲線は垂直な直線で示される。それは通有の語における流通貨幣量であって、兌換銀行券または銀行貨幣にたいする準備として金融組織内に保有される非流通部分が、総存在貨幣量からあらかじめ控除されたのちの貨幣量をさすことはいうまでもない。この貨幣供給量外生という考え方は、ケインズ『一般理論』においても捨てられていない[Pigou (1950), 47, 69]。このことからシュンペーターは、一九二〇、三〇年代の貨幣理論はその見せかけよりもはるかに数量説から自由になっていないとさえ考えている[Schumpeter (1954), 1101f.]。

数量説成立のための第二の重要な枠は、ある時点における貨幣のストックにたいする需要曲線が直角双曲線をなすことである。つまり貨幣の価格または購買力は貨幣にたいする需要量と逆比例の関係をもたねばならない。貨幣にたいする需要曲線がこの条件を満たして描かれるためには、ある一時点に存する財貨の総ストックは、同じ一時点に存する貨幣の総ストックによって買われねばならないと、財貨の買手たちによって感ぜられていなければならない。貨幣はその時点で財貨を買うためには需要されるけれども、そのものとして保存するためには需要されない。このように、交換の媒介物としては貨幣を需要するけれども、価値貯蔵の手段としては貨幣を需要しないと考えることは、じつは数量説の静学的性格と係りがある。というのはもともと価値貯蔵手段として貨幣を需要するということへの着目は、動学的な視野をもたなければなしえないものであるからである。

じっさい貨幣は結局のところ、財と交換されることのゆえに需要されるのである。「貨幣の場合にあっては、主観的な使用価値と主観的交換価値は一致する。この二つのものはともに客観的交換価値から派生される。なぜなら貨幣

はそれと交換に他の経済財を獲得する可能性から生じてくる効用以外の効用をもたないからである」[Mises(1953), 97] といったミーゼスが、また「貨幣の機能は共通の交換の媒介物として作用することにより市場の働きを容易にすることである」[Mises(1953), 29]といって、貨幣の交換媒介機能をその第一義的なものとし、他の第二次的な機能と区別したのもこの間の消息を伝えようとしたものであると思われる [Mises(1953), 34 ff.]。ただしこれは貨幣の保有される動機をその本源において捉えたものにすぎない。けれども期間が考えられるようになると、この一期間貨幣を保有しようという決意、すなわち貨幣に対する需要の生ずる根底には、この一期間もっとも流動性のある資産としてそれを保有しようという決意も認めないわけにはゆかない。ここに価値貯蔵手段としての貨幣機能を重視しようという動きが出てくるわけであって、だから私どもは期間という観念の経済学への導入と、貨幣の価値貯蔵機能への着目とは本来切り放せないものだと考えないわけにはゆかない。じっさい、「交換の媒介物として保有される貨幣の量と価値の貯蔵として保有される貨幣の量との間の区別は、基本的には選ばれた期間の長さによって決定される。じっさいこの区別は一定の期間についての配慮がなければ意味はない。結局のところすべての貨幣は若干の取引に使用されるであろう」[Hageland(1951), 312]。ところでそもそも数量説の命題が形成された当時、期間の観念は経済分析の道具にとりいれられていなかった。すべてが経過抜きで考えられていたころのことである。当時、貨幣が交換媒介物としてのみ需要されると考えられても、不自然ではない。

こうして描かれた貨幣にたいする需要曲線に、貨幣の供給曲線が重ね焼きされて貨幣の均衡価格が決定される。ところで貨幣の供給曲線は垂直の直線であったから金融組織の貨幣供給量さえ決められれば経過ぬきで貨幣の均衡価格は決定される。次に他の事情が同じにとどまって貨幣の供給量だけが変えられるならば、別の均衡価格が出現する。この二つの貨幣の価格をかえさせたものは貨幣の供給量の差違だけである。かくてこの二つの均衡点を見較べること

によって数量説の命題がいわれることになるわけである。

だから貨幣数量説がストック対ストックの基盤から生まれたとき、人々はこれを需要供給の法則の特殊な制約のもとにおける適用[Nogaro(1949), 158]、あるいは本来需要の法則なるものは、その財貨と代替する他財貨の存在をつねに想定しているのに、数量説においては、貨幣と代替されるものを考えていないが故に、それのこじつけ的な適用であるという[Einzig(1948), 401]。たしかにそうだが、私どもはホートレイの「〔数量説の〕仮定は、異なった価格を想定するのであって、価格の変化を想定しない」という記述をむしろ大きくとりあげたい[Hawtrey(1950), 41]。なぜならここには比較静学の方法が用いられているからである。

三

経済諸量をストックで捉える原始的な考え方がもたれた当時からすでに数量説は成立しえていただろうこと、それはまた当時にあっては当然すぎるほど当然な暗黙の仮説をもっていたことは上述のとおりである。

ところが日々行われる財貨と貨幣の交換を見ていた人々は、やがて財貨と貨幣の性質の差違に、そしてたんに両者をストックで捉えることの不可に気づくようになった。貨幣のストックはいわば永久不滅のものであり、同じものが繰り返して使われるのに、財貨は日々市場で貨幣と交換されるが、同じ個片はけっして再び市場に現われることはない。してみると貨幣はストックで捉えられてもよいが、財貨はストックではなくむしろフローで捉えられるべきである。だがこの二つのものを比較しようとすると、ここにフローとストックの不整合という問題が生ずる。この二つを比較可能にするためにはある単位期間を考えればよい。財貨の側はその期間に流れた文字どおりの流量を測る。貨幣の側はいったい貨幣のストックがこの期間にいくたび市場に財貨と交換されるために現われていたのであるか、すな

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com